

おみちびき

園長 児嶋 草次郎

先月の「友愛通信」に、次のような案内を掲載をさせていただきました。

「石井記念友愛社では、来年の石井十次没後 110 年、児嶋琥一郎生誕 110 年を記念して、高鍋町に、年齢・障がいの有無を越えた複合・共生施設「友愛の森」を、現在建設中です。

石井記念明倫保育園と小規模児童養護施設『秋月の家』等との複合施設については、国・県・町よりの補助金もいただきながら、資金計画のもと事業を進めています。

しかし、障がい者の働く場となる明治期の建物『せいごろう亭』改修については、補助金はなく自己資金のみでやらねばなりません。『友愛の森』の新築事業がかなり高額なため、『せいごろう亭』の改修費用については、広く募金をすることにしました。

『友愛の森』のコンセプトは、『誰一人取り残さない家族的・福祉文化的共生地域社会づくり』です。

『せいごろう亭』は、古くは町人屋敷ですが、手を加えることで蘇り、喫茶室、障がい者生産物販売所、おもちゃ美術館、絵本美術館、生涯学習室、世代間交流室、子供食堂等として活用できます。

障がい者の働く場となり、保育園の子供たち、学童の子供たちと地域と地域のお年寄との交流が行われる空間となります。また機織り、染色等伝統的文化の伝承、発信基地ともなります。

目標金額 3500 万円です。皆様方の御支援をお願い致します。」

その紙面では、「2500 万円をクラウドファンディングで募集し、1000 万円を『友愛通信』で」と記しましたが、クラウドファンディングの運営会社と相談して、「友愛通信」で 2000 万円を、クラウドファンディングで 1500 万円を募集することに変更させていただきます。こういう御時世の中、皆様には大変御迷惑をおかけ致しますが、よろしくお願い致します。「友愛通信」では 12 月より、クラウドファンディングでは 1 月より募金を始めます。「友愛通信」をお送りしてない方々に御案内いただきますと助かります。

心苦しくはありますが、私が理事長になってもう何度目かの寄付募集となります。その度に多くの方々に御支援いただいています。石井十次の理念を引き継ぐ法人として、常に開拓的な福祉事業者でありたいという思いを持っています。石井十次がそうであったように、子供たちに必要なことであるのなら、あるいは障がい者にとって必要なことであるのなら、行政が支援しようとしまいと、一歩踏み出さねばならないという使命感を持っています。

繰り返しますが、今回の保育園の改築や小規模児童養護の新設については、国・県・町の補助金をいただけますが、明治期の建物の再生については、私たちだけでやらねばならず、このチャンスを逃したら（複合として活用するチャンス）大きい建物ですので使用者も現れず、おそらく朽ちていくだけだと判断し、勇気を出して行動を始めております。何事もまず行動しなければ結果は得られないのです。

さて、今回はこの事業を進めている過程において、我が身に振りかかって来ている不思議な体験、いや私の心に取りついて来ている不思議な思い、疑問について書かせていただきます。このことは、高鍋

町内にお住まいの方々のアイデンティティにも関わることはないかとも思います。三つあります。

- ① この「友愛の森」事業は、柿原政一郎氏のお導きではないのか。
- ② 現在石井記念明倫保育園が建っている土地は「鎮守の森」ではなかったか。
- ③ もしかして、1200年代から1400年代、土持氏が高鍋（財部）を支配していた時代、ここにお寺が建っていたのではないか。

①この「友愛の森」事業は、柿原政一郎氏のお導きではないのか。

秋に、もともと町立保育園だった石井記念明倫保育園の建設工事が始まり、2週間に一度の建設会社、設計事務所との工程会議に出席するようになり、周辺を歩くことが多くなっています。私は、現在の石井記念明倫保育園の建つ周辺を明倫文化発祥の地と呼んでおります。この高鍋町の歴史を作り出して来た中核部分であり、ここで事業をやることは、その明倫文化の復興（ルネッサンス）でなければならぬと、勢い込んでいました。

周辺を散策すれば、家老屋敷通りを初め、町立図書館、美術館、旧高鍋藩校明倫堂（現在の県立高鍋農業高校）、そしてお城跡まで、10分以内で巡ることができます。こんなにすばらしい場所を与えられるなんて、石井記念友愛社にとってこれほど幸運なことはありません。そのチャンスを最大限に生かす内容にしなければならないと、張り切っていたのです。

ところが、町立図書館前に立つ柿原政一郎氏の胸像を横目で見ながら、工事現場に帰ろうとした時、愕然として立ち止まり、振り返ることになります。

「今、我々がやろうとしていることは、柿原先生がすでにやろうとしたことではないか。」

そんな思いがこみ上げて来たのです。町立図書館は、大手門通りと家老屋敷通りの交差する角に清楚に静かに建っています。今年リニューアルされ、息を吹きかえたように見えます。

そうです。柿原政一郎先生は、戦後間もない昭和28年、私費でこの町で一番重要なこの角に図書館を建設し、町に寄付されたのです。目的は、明倫堂の遺風（精神文化）の復興でしょう。高鍋藩時代の古文書類を保存し、それを検証することで明倫文化を再生させること。そのやり方を、私の父虜一郎も取り入れ、石井十次資料館を作り、そこに岡山孤児院関係資料を収蔵し、研究者を集めるという形で発掘作業を始めています。

復興や再生は、研究者たちだけで行われるものではありません。実践者との協力関係があって初めて具現化していくものです。

私は、石井十次を生み出したものは、高鍋の明倫文化だととらえているのですが、この「友愛の森」事業はその大本に迫るものだと思って来たのです。ところが、振り返ってみたら、柿原先生がすでにレールを敷いてくださっていたのです。それに気づいた時、体が震えるくらいの感動をおぼえました。つまり、これは明倫文化復興の第二弾の事業として位置づけられるのです。天国で柿原先生が導いてくださっている、今、強く感じています。

②現在石井記念明倫保育園が建っている土地は、「鎮守の森」ではなかったのか。

何の物証もなくそう感じ始めたきっかけは、石井記念明倫保育園に隣接する「火産霊（ほむすび）神社」にお参りした時に始まります。工事で御迷惑をおかけしますので、何度かお参りしていますが、その度になんとなく違和感を感じるのです。私はそれほど信仰心があるとは思ってないのですが、参道を歩いていても、じめじめして空気を重く感じるのです。晴れていてもその気持ちは変わりません。このあたりは町の中では土地も低く、駐車場あたりは、梅雨の時期になると青のりが張るような状態になりますが、それとも関係ないようです。

いつお参りしても、失礼な言い方をすれば、不気味な雰囲気を漂わせているのです。ある時、宮崎県

立図書館でその神社の由来を調べてみました。「宮崎県神社誌」(宮崎県神社庁)という本の中に「火産霊(ほむすび)神社」が出て来て次のように説明してありました。

「当社の創建は不詳であるが、寛保二年(一七四二)九月再興の記録があることから、それ以前と思われる。古老の口伝によれば、高鍋の町筋は度重ねての大火に煽られるので、たまりかねた町民は、祇園様と一緒に祀られていた火産霊の大神様を勧請(注 かんじょう 神仏の分霊をうつし祭ること)、平穏さを取り戻したと伝える。」と書いてありました(注は筆者)。

なるほど「創建は不詳」とのことです。1742年再興ということは、秋月家の治世下です。ちなみに秋月種茂の誕生は1743年です。この説明を読んで、私の疑問はますます広がっていきました。

高鍋の中心地(家老屋敷通りのすぐ東)であるのに、「創建が不詳」なんてことがあるのか。「再興」ということは、やはり秋月高鍋藩以前に、この地に神社やお寺があったのではないのか。そして何らかの事情で取り潰すことになったのではないのか。

近くの八坂神社(祇園様)にも行ってみましたが、現在児童公園になっているところも含めると、十分な広さです。おそらくこの公園が鎮守の森だったのでしょう。これと比較しても、火産霊神社の広さは不自然です。やはり、今の保育園の敷地は鎮守の森であつたに違いない。

それにもう一つ疑問が湧いて来ました。参道です。度重なる大火で延焼するから、祇園様から火産霊の大神様を移したという話は何を意味するのか。火産霊の神様をこの地に新たに祭ることを口実に、新たにこの六日町通りから侵入する参道を作ったということではないのか。つまり、ここに道を抜けば、北の上町・中町から発生した火事の延焼をここで食い止めることができるのです。南の下町・十日町からの火事も北への延焼を止めることができます。ということになると、秋月高鍋藩以前にあつたお寺か神社の参道は、お城の正面の大手門通りから侵入していたということになります。考えてみればその方が自然です。あつたとすれば、今、北から南に向かって流れる水路沿いということになるのでしょうか。

実は、このような疑問を、「高鍋史友会」の石川正樹様にぶつけてみました。一応の御返答はいただけましたが、まだ私の納得する内容ではありません。引き続き調べてくださると期待しています。

③もしかして、1200年代から1400年代、土持氏が高鍋(財部と呼ばれていた)を支配していた時代、この石井記念明倫保育園がある敷地あたりに、お寺が建っていたのではないのか。

荒唐無稽な話に発展してきています。なぜそんなにこだわるのか。

石井記念のゆり幼稚園を移転新築した際(令和2年)、その園舎の北側に小さな祠(ほこら)を建立しています。以前、この友愛通信にも書かせていただきましたが、この石井記念友愛社の土地では、今から436年前(1587)、九州の関ヶ原の戦いと言われている、島津軍と豊臣軍との合戦(根白坂の戦い)が行われました。

のゆり幼稚園の裏山は、おそらく豊臣軍が陣地を構えた場所です。この戦いで、おそらく1000人単位の若者が亡くなったと私は見えています。

第一次の高城川合戦(1578年)は、島津と豊後大友との戦いで、島津が勝利しましたが、合わせて7000人くらいの方が亡くなっていて、戦後島津は供養塔を建てています。しかし、第二次の豊臣と島津との戦いで亡くなった人を供養する話は残っていないのです。豊臣も島津も引きあげていき、後に入ったのは福岡の秋月でしたので、そのまま放置され時がすぎ去ったのではないのか。

明治時代に入り、石井十次がこの地に理想郷を作ろうとした時、土地を紹介したのは義兄の岩村真鉄(まがね)でした。これは私の勝手な推察ですが、岩村は歴史家でもあるので、この土地の由来を知らないはずはない。おそらくそのことも石井に伝え、石井は、多くの若者が亡くなった土地に理想郷を作ることが、弔うことになると思ったのではないのか。

それからまた時がたち、私たちが新たに園舎を作ることになったのです。地鎮祭というものはやりませんが、それは一つの儀式であり、その土地の歴史や由来について思いを馳せ、そこで無念の死を迎えた先人がいるのであれば丁重に供養することは、宗教の流派を越えて必要であると私は思っているのです。

話を土持氏にもどします。岩村真鉄は、この土持氏の墓を発見しています。現在の高鍋から西都へ抜ける道路添いの大平寺地域にあります。土持氏は1200年代から1400年代半ばまで230年間ほど高鍋（当時は財部）を支配しますが、西都の都於郡（とのこおり）の伊東氏に滅ぼされてしまいます。その当時の戦争は悲惨なもので、負けたら、一族郎党すべて抹殺されてしまいます。

この話と石井記念明倫保育園の敷地とが私の心の中でつながってしまったのです。何の根拠もないのですが、私がここにそのインスピレーションを記しておけば、研究者たちがいずれ論証するなり否定したりするでしょう。

太平寺は、土持氏の菩提寺であったと「高鍋町史」には書いてあります。明治の廃仏毀釈（きしゃく）によって廃されたとか。実際に、私もその太平寺地域の土持墓地に行ってみました。どこかで見た風景です。そうです。石井記念のゆり幼稚園の裏山から見下す薩摩往還（街道）と一緒にです。つまり、この墓地には、かつて土持氏の見張り台があったのではないかと。西都側から伊東氏が攻めて来たらすぐ発見できる場所なのです。お城から1Kは離れているでしょう。

戦乱のあけくれた時代、こんな所に土持氏が菩提寺を建て、お墓を作るのでしょうか。常識的に見てもあり得ないことです。

これは私の想像ですが、土持氏のお墓は城内にあったのではないかと。その菩提寺として、太平寺が石井記念明倫保育園のあたりにあったのではないかと。もしかしたら、家来たちのお墓もあったのかもしれない。しかし、戦争はすべてを変えてしまいます。城内の土持氏のお墓は、現在の地に捨てられ、お寺も破戒され、現在の地に移されたのではないかと。何の物証もないままにこんなことを書くのは危険ですが、そう想像できれば、当然この地に対する思いも変って来ます。多くの人々が殺された場所を、人々は忌み嫌います。その場所に関わることも避けるようになります。記録に残そうともせず、闇に葬ろうとします。そして、時がすぎ去っていくのです。

今回の事業を「友愛の森」つくりとしています。当然「鎮守の杜」の再生も含まれます。そして、私は田中等君の彫刻公園にしようかと町に提案しました。今、その理由を自覚しています。魂の癒しの空間になることを私の心は求めていたのでしょう。水路に蓋をすることは、高鍋町の協力で実現できそうです。本来の参道を再生できます。桜の咲く散歩道にしたいと思います。

今回、周辺を歩いて新たに発見できたことがあります。武家屋敷通りから参勤交代の組は出発したと言われていますが、その方向が私のイメージとは逆だったのです。今高鍋町にとっては、黒谷から駅に向かう道路が、言わば町の背骨となっていますが、本来のメインストリートは、農業高校の校門、高鍋藩時代の大手門から東に伸びる道路なのです。「歴史と文教の町」を標榜するならば、この道路を中心にして新たな町づくりは考えていかねばならないでしょう。狭い面積の高鍋町の歴史には闇の歴史があることも自覚しながら、そしてこの町の歴史を築いて来たすべての先人たちの思いを想像しながら、私たちは、新たな町づくりに取り組んでいかねばならないでしょう。皆様方の御理解と御支援をお願い致します。